



我が世の
春



川崎ゆきお

竹中は我が世の春を謳歌、満喫していた。といっても大した身分ではない。ただただ、穏やかなだけの毎日だ。

「我が世の春ですか、竹中さん」

「はい、しかし、二度とは言いますまい」

「ほう、どうして」

「我が世の春が蝶のように逃げてしまいますからな」

「ほう」

「今年は珍しく我が世の春をやっておりますが、去年も、その前の年も、そうじゃなかった。さらにその前の年はそんなことなど考えておらなんだ」

「そんなこととは」

「我が世の春です」

「あ、はい。でももう春は終わり、梅雨の季節になりますねえ。そして暑苦しくなる」

「はい、だから、我が世の春は、春先だけに感じるものです。そしてこれは我が世の冬がなければ、思いつかない気持ちでしょうなあ」

「我が世の春は季節ものですか？」

「我が世の夏もあることはあるですよ。よく晴れた夏の空。輝く太陽。まあ、暑いのでそんなもの見てられませんかね。我が世の夏です。エネルギーに満ち溢れた。もくもくと沸く入道雲。これを楽しめれば、その夏は、我が世の夏だったことになりましたが」

「私は暗黒時代ですよ。竹中さん」

「ああ、それは大変だ」

「だから、竹中さんが羨ましい」

「春になっても、春を楽しめない口ですか」

「はい、ただ、散る桜は楽しめます」

「ああなるほど」

「鬱陶しい梅雨も悪くはないです。あのジメジメした湿気はちょうど気分とフィットします。長雨もね。晴れないことが、いいのです」

「じゃ、我が世の梅雨ですか」

「雨降って地固まるもいいのですが、よけいにぬかるみます」

「しかし、私の我が世の春も時間の問題かもしれませんよ。すると、今度はあなたの時代になる」

「いやいや、当分は竹中さんの時代でしょ。もうすっかり地を固められた」

「春は儚いものですよ。だから、今が良いって言うと、危ない」

「何が危ないのですか、竹中さん」

「良い状態のときは、言わない方がよろしいですよ」

「それもありますねえ。あまり羨ましがらせない方がいいと」

「はい。しかし、今日はつい油断して、竹中さんに我が世の春だと言ってしまった」

「ああそうなんですか」

その後、竹中の我が世の春は、崩れだした。

夏は我が世の冷夏で、元気も消えた。

竹中は、やはり我が世の春などと他人に言ったことを後悔した。

次に春が来たときは、黙っておこうと決心した。

了